

ミニシリーズ：ワークショップ「根をデザインする」のその後

その4：今後の可能性

乾燥・半乾燥地域の土地利用を考えた場合、少しでも土壌及び水条件の良い地域は不足がちな食糧生産のために利用すべきであろう。となると、表土の殆どを失い極僅かの低木が生えているような荒廃地状のところが植林のための候補地となる。また、一般に乾燥地域にはこうした荒廃地が広く分布している。このような荒廃地における植生が少しずつでも改善されれば、他に残されている植生への負荷も軽減されることになり、そこからの恵みもより永く持続的な利用が出来ると考えられる。そこで、これまで本シリーズで述べてきたような経験を、荒廃地あるいは痩せ地に金をかけずに植林する方法の開発に役立てたいと考えるようになってきた。

乾燥地域においては広く分布する荒廃地でも、その僅かな植生を利用して山羊や羊の放牧が行われている。このような場所で植林する場合には通常苗畑で育てた苗木を現場に定植するが、その育苗には水が必要となる。さらに、現場に定植した後も、しばらくの間の灌水や動物からの保護対策が必要となる。つまり、井戸や金網の手当てが必要になり、結局は広く一般に普及するには至らない。そこで、播種後2～3週間の小苗の定植、活着のための最小限の灌水、ブロックや枯枝による小苗の保護等によって苗畑も金網も井戸も使わない手間・資金共最低限の植栽方法を試している。この場合、雨期乾期を上手く使って地上部と地下部の根系の充実を総合的に管理・調整しなければならない。実際には側根の多い苗を乾期に植え、地下深くへの給水により深い所の根を充実させておくと共に、雨期の雨を効率よく利用できる体制を整えておく。また、地上部枝葉の一部を切って、追加灌水無しで乾期を生きられるよう根系とのバランスをとることも重要である。このように、長根苗の育苗からはじまり現場での試行錯誤を通して育まれてきた「根をデザインする」という考え方は、荒廃地等の条件の悪い所に植林する場合に極めて重要なヒントを与えてくれる。

荒廃地に少しでも植生が増え天然更新する場所も出来てくると、木を植えることは水を植えることであると思えるようになってくる。沙漠化とは大気―地表―地中を通じた水循環の地中通過、滞留が量的に少なく、時間的に短くなってしまった状態であると考えることが出来る。この水循環の地中通過、滞留分を増やし、ゆっくりさせてやるのが沙漠化した所の回復や沙漠化防止につながるものと考えられる。ここでの植林の目的は、育った木材からの金銭的収益や二酸化炭素の吸収にあるのではなく、日々の生活での利用や植生のもたらす周辺環境への利便を第一と考えている。そのためにも、現地の人々が出来るやり方で植えるということが基本的に大切なことだと考えている。今後、沙漠化や土地の荒廃に苦しむ地域において、「根をデザインする」という考え方が有効に活用されて、少しでも植生が回復していくことを祈りつつ、本ミニシリーズを終わることとする。

